

第1回長崎市高浜町沖沿岸海域藻場礁（リーフボール）実証試験モニタリング報告

開発プロジェクト：株式会社 朝日テック・海の森づくり推進協会アカモク研究会

担当：高知大名誉教授大野正夫、日本大学名誉教授堀田健治

沈設藻場礁名・個数：ハイブリッド型リーフボール4基、イセエビ型礁3基 計 7基

設置場所と方法：長崎市高浜町高浜海水浴場沖の砂地で、水深4m～4m（満潮時）のところで

DVDに示す位置に設置した。ハイブリッド型リーフボールの4基には、周辺の岩礁に繁茂しているホンダワラ類のキレバモク、マメダワラ、イソモク、ヤツマタモクを網袋に入れて取り付けた。

栄養剤：鉄分などを含む塗料（黄褐色）を塗布した。

設置記日： 令和2年（2020）3月11日 午前9:00

潜水調査日： 令和2年5月14日、午前9:00（沈設後2か月を経た時に、潜水調査）。

調査報告：リーフボール礁には、取り付けた網袋より生育したキレバモクを主として、ホンダワラ類の著しい成長が見られた。付近の岩礁域のキレバモクと同様な生育をしていた。ほかにマメダワラやイソモクも正常に繁茂していた。

網袋を設置しないエビ礁の表面には褐藻の袋状のフクロノリが密生した。周囲の岩礁域には、キレバモクが密生した藻場と、ワカメが密生していて、成熟した生殖器官部位が残っていた。

これらの観察結果から、設置した藻礁（ルーフボール）は、新しい藻場造成の基質として良好であることがわかった。なお夏季に入り海藻の枯渇時期になるが、秋季以降の海藻の繁茂が期待される。

キレバモクについて：近年、南方系のこのホンダワラ類は、沖縄から長崎、高知、千葉までの沿岸に拡大繁茂して、ホンダワラ群落の主要は種になっており、海域の温暖化の指標種となっている。形態は気泡は球状で歯型の葉片で、主枝に棘（とげ）状の突起があるのが、区別点となる。



キレバモクの押し葉標本

鋸葉縁の葉体で、主枝に棘球状の気泡が、区別点